

グローバル

第 15 号

第 1 部 2015年度 国際交流研究科講演会

第 2 部 修士論文要旨



フェリス女学院大学大学院国際交流研究科

目 次

第1部 2015年度 国際交流研究科講演会 文学を通して得られる人生の報酬

保 坂 和 志…………… 1

第2部 修士論文要旨

団地のコミュニティ構築は買い物難民予防策になりうるか
——横浜市内高齢団地を事例として——

朴 ハンナ…………… 8

第 1 部 2015年度 国際交流研究科講演会

文学を通して得られる人生の報酬

講師 保坂和志氏

●考えることの大切さ

今日のテーマは「文学を通して得られる人生の報酬」ですが、つまり人生はお金じゃないという話です。大きく分けて3つぐらいの話をしようと思います。

まずは、僕の女性の知り合いの話です。彼女は、紆余曲折した人生を送ってきた人です。高校卒業後、すぐに大学には行かずに海外へ行き、帰国後はパソコン教室の先生になっていたのですが、いろいろと悩む人生を送っていました。

そして彼女は帰国後に大学へ入り直したのですが、そこで年下のある女性と友人になりました。ここでは仮に「エリカちゃん」としましょうか。エリカちゃんは普通に商社マンと結婚して普通の家庭をもったのですが、その姿を見て私の知り合いの女性は「私もエリカちゃんみたいに普通の人生を生きられればラクなのになあ」と言うのです。でも僕から見たら、彼女の方が人間味があって、ずっと魅力的な女性なのですが。

一般的にはエリカちゃんみたいに普通に結婚して、普通に家庭を維持してというのが安定した人生、幸せだと思われるけれど、僕は果たして本当にそうなのか、と言いたいのです。

そして今日の僕の話はわかりにくい部分もあるかもしれないけれど、わかりやすい話というのは明日には忘れてしまうものです。わかりにくい話はそこだけは覚えているということです。エリカちゃんのような人なら、よくわからないことを素通りしちゃうかもしれません。それでも本人は幸せなのかもしれません。「わからないことをいろいろ考えても仕方ない」というふうな。

ここで大事なことは「考える」ということです。「考えずに生きて行くことが本当にラクなのか」ということと、果たしてそれが本当にできるのか、ということです。

H.J. ウェルズ（ハーバート・ジョージ・ウェルズ）という作家の「タイム・マシン」というSF小説があります。ストーリーは80万年後の世界で、そこには天使のような無垢な子どものような人たちがかりがいて地球が楽園のようになっています。しかし、そのうちに何か変だなと感じることが起こります。その無垢な子どものような人たちが、物陰を怖れ、夜になると何かをすごく怖がってどこかに避難してしまう。というのは、夜になるともう一つの進化した人類が現れて、無垢な人たちを捕まえて食べてしまうからです。一見地上の楽園に思えた世界は、実はまったく逆の恐ろしい世界だったと、そういう話です。

僕はこれを結構リアルな想像であり、現代に通じているのではないかと思うのです。

19世紀以降、近代の産業やさまざまな工業製品が進めてきたことは、生活の苦勞を取り払うことでした。いちいち川まで水を汲みにいかなくてもいいように水道を引いたり、手で洗わなくてもよいように洗濯機を作ったりして生活をラクにしてきました。しかし、社会をどんどん便利にラクにした結果、人間力がどんどん弱くなったと思うのです。僕なんかもそうですが、もうすでにだらしなく、なさげなく“させられちゃって”いるのです。何もかも自分の力で獲得するということができなくなっています。例えば、雇止めや非正規雇用などの社会問題によって、現代人は多くのストレスを抱えて苦しんでいるといわれます。しかし本当に大変なら田舎に行って農業をすればいいのでは。「でも農業は朝早くから一日中の肉体労働で大変」とか、すぐに「それはできない」と思うかもしれないけれど、それも何かに思い込まされているだけのこと。実はそっちの方がラクなのです。体力的にはキツイかもしれませんが、心のストレスがないのですから。

だから比喩的に考えると、都会の中で飲食店とか工場とかで「非正規雇用でも働くしかない」というふうな脆弱な気持ちになってしまっている、思い込まされていると言えます。

だから僕は今の社会が、「タイム・マシン」の小説にあるように、食用にされていても何も考えない人間、ただひたすら危機やパニックが起きた時を怖れて続けている人間で構成されているように見えるのです。

●自分の尺度をもつ意義

次に、エリカちゃんとは違う、もう一方のいろいろと苦労している女性の話をしましょう。

僕は人生を生きるというのは、やはりステージを上げるためにあるものだと思います。そのステージというのは、人が与えるものではなく、自分の中で次の段階、次の段階と積み上げていくものです。

例えば野球でもサッカーでも、勝ったか負けたかということがわかるだけでも楽しいけれど、次の段階になって、ゴールが見事だったとかキーパーがすごかったというような内容がわかるようになると、勝ち負けしか見ない人よりも1つ上の見方になる。そしてより細かく試合の内容に目を配るようになれば、さらに上の段階に行けるわけです。

そうすると勝ち負けにしか関心のない人は、そういう細かい面白さに気付くことができない。詳しく見る人は、ただの勝ち負け以上に面白さがわかる。これは別にスポーツの観戦に限ったことではないのです。

料理でもそうです。ウチの近所に美味しい中華料理の店があって女房とよく行くのですが、彼女は「どうしたらこんなふうに肉が軟らかくなるんだろう」とか「柔らかいけど形が崩れていないのはなぜだろう」とか言う。僕は料理をしないから、ただ「旨い」と言うだけ。それだけ家内の方が料理に関してはステージが上なわけです。

友人に「ウチの女房は豆腐が好きで、300円とか500円とかすごいのを買ってくるんだけど、僕は一丁50円の豆腐との味の違いがわからないんだよ」と言う人がいる。これはやはり味の違いがわかる方がそれだけ人生が豊かで深いのです。

入り口に立っているだけでもそれなりに面白いと感じることはできるのだけれど、奥へ奥へと行けばいくほど、いわゆる風景が違って見えてくる。

ですから「エリカちゃんみたいに生きられたらラクだなあ」と言った彼女は、エリカちゃんよりもっと複雑な風景を見ているから、彼女の人生というのはとても豊かなのです。

ただし、そこでなぜ彼女の方が悩んでしまうのかということ、自分の人生を自分の尺度で見る、自分の言葉で自分の生きてきたことを語るということをしていないからです。

こうしたことは学校教育では教えません。成績がいいとか、運動ができるとか、外からの比較でしか評価しません。勉強で20番だったのが10番以内に入って「努力したね」と評価されても、そういうのは全部、外からの評価でしかありません。

人の目や人の尺度で見るのではなく「自分で自分の尺度を作れ」ということなのです。

とにかく、自分がどう生きて行きたいとか、どういう毎日を過ごしたいかという、それが先にあるべきで、とにかく評価とか、人と比べてどうだとか、勝った負けたとか、ココまでやったから偉かったとか、そういうことでは人生が一度も自分のものにならないのです。

●文学や芸術における価値観

最後は、創作に関係した話です。

僕が文章を書いた「チャーちゃん」という絵本ですが、絵を描いたのは小沢さかえさんという方です。

実はこの絵本、僕が文章を渡してから、さかえさんの絵が仕上がってくるまでに3年もかかったのです。だから当時僕は途中で「これは出版には至らないだろうな」と思っていました。何かの理由があって小沢さんが投げ出しちゃったんだろうなと。

ちなみに僕がその文章を仕上げたのは20分か30分でした。ただし、文章ができあがるまでは10年かかっています。

チャーちゃんというのは、僕が飼っていた猫の名前ですが、死んで4年ぐらい経っても、当時の僕はどこか悲しみを引きずっていました。そんな時に、キース・ヘリングという人の描いた犬や猫が踊っているイラスト集を見て、「あっ、チャーちゃんが踊っている！」と思い『死んでもチャーちゃんは踊っている』という絵本を作りたいと思いついたのです。ただそうは言っても、具体的な言葉はなにも出なくて、ようやく10年後ぐらいに、あるひと言が浮かんだのです。「僕、チャーちゃん。今踊っています」のひと言。でもそれ以外は何も出なかった。そして十年後によくアイデアが具体化して、最後は20～30分で書き上げた、そういういきさつです。

ところが出版後に小沢さんに聞いたら「投げ出したなんてとんでもない！3年間ずっとやっていたんですよ」と言われました。つまり小沢さんは20枚ぐらいの絵に3年間の時間をかけたわけですから。これは世間で通用する時間のモノサシとは違うものですよ。

さて、もう1つの話。

僕には20歳も歳の離れた80歳のいとこがいますが、若い時に画家になりたいと思い、何度か浪人して東京芸大に入ったのです。

そしてもう一人の息子が稼業であるお菓子屋を継いだのですが、彼は、家族も呆れるほどお金の話しがしないのです。財産は1億だか2億だかあって生活に困っているわけではないのですが、とにかくお金の話ばかりなのです。

例えば、彼は数年前に車で単独事故を起こしたのですが、骨折して入院しても「保険のおかげで300万円儲かった」と誇らしげに言っていました。すでに財産が1億円あるのに、300万円なんてその3%です。それでもお金が入って嬉しいという気持ち。何のために1億円持っているんだかわかりませんよね。

お金というのは、まったく自分の外にあるものなのですが、不思議なことに、人の気持ちをととてもむしばむものです。そのいとこはたまに電話で話したりもするけれど、いつもお金の話ばかりで、あまり面白くない。

一方、絵描きの方のいとこ会うと、やっぱりこっちの話の方が格段に面白い。人間は、生涯を通じた関心の置き場所の違いでこんなに差がでるのかと再認識しました。

文学でも芸術全般でも、自分がその場では簡単に理解できないものに出会うというのは大事です。すべてがその場で説明できるようなものでなくとも「あの一言はなんなのだろう」などと考え、自分の尺度で読み込んでいくことが非常に大切なことです。自分のわからないことを言う人、やる人、存在自体がよくわからないという人に出会うことは、深く考えるきっかけになるという意味で、とても大切なことです。

とにかく「なぜ？」と考えることが、とても重要です。そこでそれを見ないでスルーするか、それをすぐに会得できるか、何年も心にとどめておくかというのが、文学や芸術に出会うということなのです。

〈質疑応答〉

〔質問〕

今日のお話は、人から見られる評価で自分を判断してはならないという内容だったと思いますが、そうした中で保坂さんにとって文学賞というのはどういうものと捉えているのでしょうか。

〔保坂氏〕

まず、若い頃の文学賞はそれがないと注目しない人がいるから、しょうがない。受賞しなくてもいい

のだけど、何とか賞を受賞という、少しは注目する人がいたり本が売れたりするので、僕も文章を書いてその収入でやって行かないとならないから、というのがひとつ。

もうひとつは、これもちょっと内面的な問題なのですが、自分がやっていることが、自分の中では間違っていないと思っていても、自分だけがそう思っている可能性も否定できないのです。だから1回ぐらいは賞をもらうことで少しは自信になる。

ただ僕には小島信夫という大先輩と、もうひとり信頼する同級生がいて、そのふたりが僕の道しるべでしたから、文学賞の受賞よりも、この二人がどう読んでどう感想を述べてくれるかの方が大事です。ただ世間では、文学賞をひとつかふたつとっていたほうが、いろいろと通りがいい。紹介してくれる際などに、わかりやすいという意味で。

[質問]

保坂さんは、文学の翻訳に関してどう思われますか。

[保坂氏]

僕は外国語が全然読めない、翻訳があることはまずありがたい。

ただひとつだけ困っていることもあります。英語圏にイーヴリン・ウォーという作家がいるのだけど、彼の小説を一番多く訳したのが吉田健一という人。彼の訳したイーヴリン・ウォーの文章にはすごくクセがあって面白いのだけど、他の人が訳したものは物足りなくて、他のどの翻訳も面白く思えなくて困っています。

あとカフカの翻訳でいうと、90年代に池内紀（おさむ）という人がカフカの全作品を翻訳したのですが、彼の翻訳はそれ以前のものよりも、ずっとわかりやすいのです。しかしそれまでカフカを原文で読んでいる人にとっては、やはりカフカの書いている文章とは違うと感じると思います。

それと同じことが、何年前かにベストセラーになった亀山郁夫訳のドストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」にも言えます。面白いようにスルスルと読めるのです。

なぜかという、他の翻訳者の本は、今まで書かれていたことを引きずりながら書いているのです。一般的に、ドストエフスキーのセンテンスというのはかなり情報量が多いので読むのが重い。それが亀山氏のドストエフスキーだけは、いろいろと書き連ねられているものがなくてスルスル読めるのですが、僕はこれは違うんじゃないかと思っています。

[質問]

書いたり読んだり、言葉を豊かにして行くために、子どもたちにしておいてほしいことはありますか。小学生とか、受験の国語の中ではないものなど。

[保坂氏]

まず僕は小学校入る半年前まで時は読めなかった。だから絵本も絵を見るだけでした。文字というのは思考が豊かになる部分もあるけれど、逆に文字によって思考が限定される部分もある。ある幼稚園の園長先生が言っていましたが、字を読める子は字を読んでいるが、字が読めない子は絵本全体を見ていろんな発見をしている。だから字が読めることが必ずしも良いことかどうかはよくわからない、と。

それから小学生ぐらいからよく本を読む子もいますが、本を読んでいるということは体が止まっているということでしょう。走りながらとか、木登りしながら本は読めない、子どもとしては他にもやるべきことがたくさんあるのではないかとも思います。実際、僕のように中学校の途中から字だけの本を読むようになって、一生本は読むようになるわけですから。

もうひとつ、小学生の時にとても社会性が高く、思いやりがあると思われていた子どもが、大人になって意外にひどいやつになって、中学までひどいことばかり考えて人の殺し方なんか考えていたヤツが、大人になって人に対する思いやりが深い人になった例が結構あります。なぜかという、中学までまっ

たく人間味がなかった

子どもというのは、全部自分で考えていくのですね。社会のルールとか良い悪いとかをすぐに受け容れないで、全部自分で組み立てていく。なので社会的な良い悪いがなかなか出てこない。でもそこで自分と同じように、他人にも悲しいという気持ちがあったり痛みがあることを中学ぐらいからずっと考えていきます。

一方、思いやりがあるとか道徳的と思われていた子どもは、言葉を覚えたり挨拶するような外側からの感覚で「可哀想な人には手をさしのべましょう」というような一般的な社会の規範を受け容れていくから、あるとき自分が生きる世界が別になったとき、たとえば金融業などに就職したときに、お金を返せない人は首でもくくってもらうしかないとか、生命保険があったらそれで払ってもらうしかないとか、そっち側の理屈になってしまう。だから子ども時代というのは、うーん、何をしたいかわかんないですね（笑）。

【質問】

論理的な正しさみたいなものに、今みんなとても難儀している。自分が正しいと解っているのに、論理的にひっくり返せないから苦しいなど。保坂さんのエッセイに「論理」についての話があったので、そうしたことをお聞きしたい。

【保坂氏】

論理的に正しいことは簡単に言えるのだけれど、それが本当に正しいかどうかはわからないですね。

「あなたの論理に私は勝てないけれど、だからといってあなたが正しいわけではない」ということです。それだけをみんなが共通理解すれば、論理なんて関係ないのです。論理的に何かを構築するということは他を切り捨てていくことだから、部分的に正しいだけだと思います。

よい例かどうかかわからないけれど、医学は20年単位ぐらいで常識が変わっていますね。今まで「こうしろ」といわれてきたことが「してはいけない」になってきています。たとえば膀胱炎というのは、今までは水をたくさん飲むべきだったけれど、それはむしろ悪化させるという意見もあるそうです。一見論理的でつじつまが合っているけど、どちらが良いのかわかりません。ただ医学においては、治せるか治せないかという一線がハッキリしているから、逆に論理だけで閉じないというところはある。

大体、来年の経済どうなるとか、エコノミー予測とかの話になると、まったく逆のことを言う人がいますよね。

【質問】

自分の尺度で考えようとしても、社会生活の中では集団のルール等によって摩擦を受けます。そうすると生計を立てていくためなど、摩擦を避けるために自分が変わって行かなくちゃならないということが起こると思うのですが、どういうふうに妥協したらよいのでしょうか。

【保坂氏】

あの、すみません。僕はそういう部分は余り考えずに生きてきたから、答えられないのです…。

【質問】

芸術と現実の融合はどういうふうに考えたらよいのでしょうか？

【保坂氏】

それは芸術を本当にやる人は気にしていません。そういう社会との接点や自分の需要と供給みたいなことを考えるのは、アーティストではなく商業デザイナー等ではないでしょうか。

お金や時間に現実的な接点をもとうとすればするほど、アーティストとしては不幸になってしまうものです。我が道を行ける人の方が幸せなのです。

何しろアーティストとか文学者とか、創作する人として生きるということは、「金は二の次」と思ったところから始まるわけだし、社会でどう評価されるかということにいちいち惑わされていたら、面倒臭くて芸術や文学なんてできないというのが基本です。

[質問]

でも芸術をやりたいなどと親に言えば、やめなさいとか言われるし、どこかで現実とのバランスを取らないといけない気がするのです。ちゃんと生計を立てないといけないかなとか。

[保坂氏]

アーティストが評価されないとしたら、現実離れしているからではなくて、現実離れしているのではないだろうかという、自身のさもしい気持ちがあるから評価されないのです。やる気があるのならやればいいだけです。もしあなたが何かを作るとか書くとかをしたいのだとしたら、僕のアドバイスとしては「そんなこと言ってるからダメなんだ」となる。そこを本当に信じられるかどうかです。

「そこまで飛ぶんだよ」という場面で「無理ですよ」と言うかどうか。そこまで飛んだヤツしかやっていないんだよ、ある日飛べるんだから、ということですよ。

それから、さっきの絵本の話で言い忘れたのですが、僕の知り合いの小説家で、いまひとつの人がいるのですが、彼の何がいけないかということ「ここで考えろ」という時に、しっかり長い時間考えられないという点です。絵本の「チャーちゃん」の絵を描いた人が3年をかけたように、そういう時間の使い方ができない。

彼の未発表の小説を僕が読んで、「縁側でスイカを食べるシーンだけけど、これはないだろう」と言うと「はいわかりました、じゃあこうします」とすぐに代案が出てきてしまう。そうではなくて「いつまでも考えられる」こと、何日とかではなく、何ヶ月単位ぐらいでキチンと考えるということは非常に大事なことです。

[質問]

「チャーちゃん」のときに何年か構想があって、そこからひと息に書き出せたというお話がありました。そういう場合に保坂さんは最初にビジョン（絵）が出てくることが多いのでしょうか、文章からでしょうか。

[保坂氏]

最後の段階は文章ですね。ただそこに至るまではいろいろあります。

「未明の闘争」という小説の時にはビジョンが先かもしれません。冒頭のシーンに近いものを夢で見て、それをずっと忘れなかったから「あの夢で始まるようなものを書こうかな」というのがきっかけでした。あのビジョンは特殊で、まったく関係ない場所に石が1個だけ序盤戦で置かれて、その石が気になって仕方ないのだけど、その石を気にするのをどう振り切るかというのが課題の抽象的な小説なんです。

「プレーンソング」が僕のデビュー作ですが、あのイメージは変な人が現れて自分のことをずっとあーでもないこうでもないとしゃべっていくというイメージ。コーラン（イスラムの聖典）鐘楼のレコードを持っているのですが、そんなイメージでした。

[質問]

私の中にも「エリカちゃん」がいるなと思いましたが、でも人はどうしても他人の承認が欲しいなというところがあると思いますが、保坂さんは自分だけの尺度や視点を持つことと、他人の承認を得ることのどこによりどこを置いているのですか。

[保坂氏]

僕自身は子どもの頃から勝手な子どもだったから、人の評価よりも自分の尺度の方が強かったですね。

そして、人の評価を気にしている自分が大嫌いでした。「ああ、いまオレ卑怯なことやっているな、ダメだ」という感覚があったのです。とにかく自分で自分を変えろとか、人からの承認を得るために自覚を持つというのは、僕には無理。

この間ウチの家内が「眠れない、眠れない」と言うのだけれど、実際は寝ているんですよ。眠っているときは意識がないから自分では気付かないだけ。目が覚めた瞬間に、よく眠れたとか眠りた足りないとか思うけれど、それは眠り自体の意識じゃないから、眠りの認識が薄い人はいるだろうと思いました。目が覚めた瞬間にどこまで眠ったかを実感できる人とそうでない人がいる。だから、眠っている自覚がないから眠れないと言っているのではないのでしょうか。それほど自覚って難しい。

そして、自分の尺度をもつために末宇事があるとしたら、「今自分は人の目を気にしているかどうか」という意識を常に持ち続けていることです。「あ、また自分は人の目を気にしちゃった、イカン、イカン」と心掛けていると、毎日毎日の積み重ねの中で、人生にだいぶ差がでると思います。

(了)

第2部 修士論文要旨

団地のコミュニティ構築は買い物難民予防策になりうるか

—— 横浜市内高齢団地を事例として ——

朴 ハンナ

指導教員 ベンヤミン・ミドルトン

1970年前後に都市に流入した団塊世代の住宅難を解消するために郊外に団地が大量に建てられた。しかし、その後40年が経過した現在、居住民の高齢化と建物の老朽化など多くの問題が次々と現れることによって団地はその機能を失う危機的状況へのカウントダウンが始まったといつてよい。

本論文では、こうした団地が抱える多くの問題の中でも、特に「買い物難民問題」に注目し、団地居住者の高齢化に伴う諸問題の解決の鍵として「団地のコミュニティ」がその予防策になりうるかを考察する。

まずは買い物難民について説明する。買い物難民問題は1970年代、欧米で最初に注目され、それは「フードデザート問題」と呼ばれている。都市化の進展で大規模ショッピングモールが郊外に建設されたことにより、地域の小規模店舗が倒産していったことが原因で生じたものである。日本においても、地方の農村地域で同様の現象が生じた。しかし、欧米と日本の買い物難民問題には相違点がある。欧米では生鮮食品を買い求められない貧困層をめぐる問題として捉えられていたのに対し、日本では農村地域のみならず、高齢化が進んだ都心部の「団地」においてその現象が生じたことが特徴的な違いといえよう。団地でコミュニティのつながりが希薄したことが問題であると浅川（2010）は指摘する。

買い物難民問題は、地理学や流通学、栄養学などで研究されており、全国で買い物支援策が提示されているが、コミュニティ観点からの研究は多くない。なぜ、団地でコミュニティが希薄したことが買い物難民問題の発生原因となるのだろうか。そもそも、地域文化に共通性のない人々が集まって住んでいる団地も「コミュニティ」ということができるのであろうか。この問題を含め、コミュニティが構築されることで買い物難民問題が改善されるかを検討したい。

具体的な分析の視点としては、コミュニティの概念と機能を明らかにしたうえで、団地のコミュニティが持つべき姿を考察していく。また、団地の様々な住宅タイプによって住民の生活ニーズが異なっているため、ここから生じるコミュニティ意識の差が団地のコミュニティに及ぼす影響を実際のフィールド調査を通して比較した。ここでは、横浜市で既に買い物難民問題が生じた団地で「栄区公田町団地（以下、公田町）」と、まだ生じていない団地で「戸塚区ドリームハイツ（以下、DH）」と「旭区左近山団地（以下、左近山）」と比較をする。それぞれの団地でコミュニティがどのように活動しているか、団地内で問題改善に取り組む姿勢を評価し、まだ買い物難民問題が生じていないところでは、予防策としてコミュニティ構築の重要性を明らかにし、今後の展望を述べる。

第1章では、団地のコミュニティの関係と、それらの諸問題の解決策を具体的な事例を通して考察した。まず、高度経済成長の波に乗って団地の建設戸数がピークとなった1971年、全国に8万3,600戸の団地住宅が建設された。しかし、現在の横浜市は、年少人口比率の低下や高齢化率の上昇、高齢者人口の増加の傾向が表れている。以上の状況から横浜市に建てられた団地に必然的に起きる問題として、空き家の増加、地域活力の低下、地域活動の担い手の不足などが考えられる。

団地では買い物難民問題のほかでもあらゆる問題を抱えているが、今後これらの問題を解決していくために、コミュニティがどのような役割を果たすだろうか。まず、コミュニティという定義について筆者は、松原（1978）の指摘に従い、コミュニティの主体となる住民が生活を向上させようとする方向に一致できる人々であることと「心の問題の発生予防、心の支援」の面を加えて「コミュニティ」と捉えたい。したがって、地域社会で発生する問題はコミュニティによって予防することができる。そのた

めに、共通の思いと向上意識を持って生活する場でコミュニティを構築することが重要であるということを証明していく。

「団地」も人が住む場であることから「地域」同様であると見なした時に、団地にすでに既存のコミュニティが作られている可能性を考えることができる。しかし、団地居住者の個人化や団地住まいを「借りたもの」という意識を持ったことが原因と言え、このような状況によって団地住民がコミュニティ構成員であることの意識を持つことには限界があると考えられる。このコミュニティ構成員であることを意識させる存在として、一般的には、自治会というものが存在する。団地住民は、生活に関連した問題解決のため自治会に頼る傾向が強い。しかし、自治会は「共通の利害にかかわる問題の解決」のために作られた機能的集団であるため、住民の問題が解決された時点で徐々に衰退してしまう問題点がある。

また、現在、団地は「高齢化」という避けられない課題に直面している。団地の居住者として若い世代が入居したとしても、自治会の委員として働くほどの人材育成ができていない現状では、自治会頼りでは限界を感じる。団地住民も意識を変え、自主性を持ったコミュニティの一員として自ら問題を解決していかなければならない時が来ている。

このように、団地のコミュニティは、自治会による個人化されたコミュニティであったといえ、これはいわゆるヴァーチャル・コミュニティ（擬似コミュニティ）の性格に似ていると筆者は考えた。ヴァーチャル・コミュニティはネット上に作られたコミュニティではあるが、その性格は「高度に個人化される」こと、「帰属の問題がコミュニケーションの流れの中に姿を消していく」こと、「場所や地域性、象徴的な絆が失ってしまう」ことであり、以上の性格は団地の社会関係と共通している。しかしここで、団地のコミュニティが擬似コミュニティであってはならないと筆者は主張したい。なぜなら、「擬似」の言葉のゆえに住民が土着意識や定着意識を持たず、さらに個人化してしまっていると考えられるからだ。自治会に任せるだけで自らの解決がないコミュニティの姿から抜け出すためには、団地のコミュニティを擬似コミュニティだと片づけてはならない。

実際に横浜市内団地のコミュニティが擬似コミュニティであるかどうかを検討した結果、公田町とDHは住民が自主性を持って生活場の問題を解決する場面に協力的に参加していることで「コミュニティ」としての機能をしている。一方、左近山は連合自治会による動きが主であって、住民のコミュニティに対する協力は見られなかった。現状では左近山の自治会は「擬似コミュニティ」として見なすことができよう。3つの団地自治会では住民を中心としたNPO活動が行われているが、①強いリーダーが中心となり、②多くの賛同者が協力し、③買い物弱者（難民）を仲間として見守っていく仕組みになっている。しかしながら、左近山と公田町・DHには発生から活動に至るプロセスの中で大きな違いがある。左近山の住民は、入居以来関与があったコミュニティである自治会との関連性が極めて薄く、個人の発意から始まったコミュニティカフェの活動成果が見られるまで約8年の時間を要している。連合自治会によって建てられたNPOも活動から1年しか経っていない為、コミュニティ作りの途上にあるといえる。しかし、コミュニティカフェで見られた住民の動きは注目すべきところである。

このように、3つの団地の特徴から、団地に起こる身近な問題解決を住民と一緒に取り組む小さなコミュニティ作りは、今後起こり得る「買い物難民問題」の解決にも重要な役割を持つ。

第2章では、買い物難民の用語と背景をまとめ、郊外団地における買い物難民現象を検討し、左近山での予防の必要性について考えた。特に、第1章にて、左近山団地が擬似コミュニティであることが判明したため、その点をいかにして改善して行くかを考察した。日本において買い物難民問題が起きた地域の共通点は「①急速な高齢化の進展、②坂の多い地域、③スーパーの撤退」の3つにまとめることができる。さらに、都市近郊に起きた買い物難民問題は、1970年代前後に建てられた団地で多く見られるという共通点がある。この時期に建てられた団地は都心部及び市街地から離れているため、高齢者にとって外への買い物は身体的な不便さばかりでなく、精神的な負担まで与えている。しかし、団地内の商店は相次ぎ撤退し、高齢になった住民は「買い物難民」になってしまった。特に、東京都の大都市や

神奈川県のある都市部でもこの現象が起こったことは、地方都市だけが抱える問題ではなく、三大都市圏でも深刻な問題であることを伝えている。

既に確認できた買い物難民問題の4点の特徴を持つ団地では、買い物難民問題が生じる可能性があるのではないだろうか。その一例として、左近山での買い物難民現象の予防策の必要性について考えた。その結果、左近山の自治会を中心としたコミュニティは擬似コミュニティであったことに再度言及すれば、買い物難民問題は左近山に十分に発生の余地があると考えられる。だからこそ、予防の重要性を感じる。住民が主体となって団地の問題改善に行動していくことで、擬似コミュニティではない住民主体のコミュニティが形成され、今後生じる可能性がある買い物難民問題を予防できるのではないかという結論に至った。

第3章では、団地でのコミュニティ構築の必要性を改めて検討した。第1章と第2章を通して、左近山で買い物難民問題が起こる可能性を把握し、問題を予防する手としてコミュニティの構築を提案したが、その主張の具体的な裏付けを左近山団地の現状を基にして行った。

調査対象となった左近山団地について簡単に説明しておく。左近山団地は、神奈川県下でも最大級の規模の団地として昭和40年代に建てられた。また、人口は約1万人が居住するマンモス団地であるだけにバス便が多く、便利な交通環境である。団地に坂が多く、バスがない移動は厳しいため、バスの需要は常にある。二俣川駅や東戸塚駅付近で買い物できることから、まだ左近山には買い物難民問題の要因は見られない。しかし、団地内の商店街にシャッターが下りたままの店舗がいくつかある等、衰退が見られる。左近山に65歳以上のなかでも70歳代がもっとも多く住んでいるが、今は健康な時期であると感じた。しかし、10年後を考えてみれば、健康寿命の限界に近づく程、家の外に出るのも難しくなり、バスの利用客が減ればバス便も減り、団地内での買い物を余儀なくされる。エレベーターが付いてない5階建ての住宅は登り下りが辛くなり、外に出ることが困難な高齢者が増えると買い物難民になる可能性が高まる。

以上のような状況から左近山にもいずれ買い物難民問題が起こる可能性を考慮すると、3つの点が重要だと思われる。まず一つ目には高齢化である。買い物難民は、地方にのみならず郊外に建てられた団地で高齢化が進んだ地域に主に見られた。左近山は、高齢化が40%という極めて高い高齢化率と人口減少が見られる。また、二つ目には建物の老朽化や坂の存在が挙げられる。坂は、高齢者にとって転倒などの危険性があるため、遠出を困難にする。また、エレベーターが付いてない5階建物も買い物を自由に行けない苦を与える。買い物難民地域と左近山に同様な問題点がある。さらに三つ目としては、活気のないショッピングモールの存在である。買い物難民問題には、大型店舗立地が小売店の売上減少に影響を及ぼしたという現状が深く関わっていると考えられる。

そのような懸念はあるが、買い物難民問題との共通点が3つ当てはまったにも関わらず、買い物には不便を感じていない住民が多いという現状がある。買い物難民問題が起こった地域に比べ、まだ左近山の団地住民は70歳代で健康であるからだ。さらに、昭和40年代に建てられた団地では、高齢者が暮らしやすい居住環境を提供するため「団地再生事業」が行われているため、物理的な不便には至らない現状もあることは事実である。しかし、高齢者にとって構造的に便利な住環境が整えられることだけが生活に満足感を与えるのではない。長らく培っていたコミュニティがあるからこそ、高齢者になっても住民同士の支え合いで団地生活を続けられているのである。

今回、コミュニティカフェを利用する住民を訪ね、団地での生活やコミュニティの意識について話を聞いた。同コミュニティカフェが、住民同士の絆を深めることに役立っているかどうかを明らかにし、一人一人の住民がコミュニティに与える影響を考察するためである。インタビュー対象者が70歳前後だったことで、左近山団地のもっとも多い世代の動向を知ることができた。今は夫婦で二人暮らしか一人暮らしの場合がほとんどだが、団地の入居から子育てを経て現在に至るまで共通の経験と思いをした人々であった。彼らのコミュニティは入居当初から作られていたことが分かった。近所の高齢者の見守

りや声かけといった日頃のコミュニケーションを大事にしていたのは、彼らのコミュニティは擬似ではないことを意味すると考える。40年の年月が経てもこの団地に住み続けているのは、コミュニティの存在のゆえではないだろうか。そのため、暮らしの満足度は高く、建物にエレベーターがなくても不便と感じず、むしろコミュニケーションが生まれることを強調して団地の生活全般に満足していた。「遠い親戚より近い近所」を頼るようになった彼らを見ると、団地のコミュニティも地縁コミュニティであると考えられ、団地のコミュニティは擬似コミュニティではなく一種のコミュニティとして見るべきであるということができる。

また、コミュニティカフェのような居場所があることも大切に思っていた。しかし、次世代との交流の面では、若い世代の誘致は難しいと考えており、団地が高齢化したことに対する悩みを持っている。彼らが元気に活動するまでは、買い物難民問題は表面に現れないだろう。しかし、彼らを支える若い世代なしにますます進む高齢化のもとでは、すでに75歳前後では身体的な負担が増え、外へ出る活動に制約がかかりつつあると考えられる。同世代が多く住んでいる左近山では、近い将来に一気に買い物難民が生まれる可能性が十分あるのではないだろうか。

団地住民のインタビューから、彼らがコミュニティを重要視していることは早い段階で把握できていた。しかし後になって、住民が持つコミュニティの範囲が団地全体という極めて広い範囲であったため、分譲と賃貸タイプが混在する左近山では、団地全体の住民が共通の思いを抱き問題を解決していくには限界があることが明らかになった。UR都市機構が団地再生の取り組みをしているが、その一対策として住民が主体になる活動を支援するために行われたワークショップで、住民の素直声を聞くことができた。しかし、1街区から9街区までの全住民を対象にした広範囲のものであったために、住宅環境が異なる分譲と賃貸とでは参加を促すには共通の思いを抱くことには難しさを感じた。

そのような問題点も含め、左近山において必要と感じるものは「コミュニティの場づくり」である。住民が共通の思いを持って互いを支えてきたコミュニティの姿を築いていくことができる場所づくりが必要ではないだろうか。それがコミュニティカフェであると筆者は考える。コミュニティカフェは、居場所を求める高齢者の住民に適した場所であること、また、食事ができることや買い物ができる利点があることが買い物難民問題の予防としても必要な場所であると分かった。また、コミュニティカフェは、他人の関わりや生きがいを育てる役割を担い、住民自らがコミュニティカフェの運営に参加することにより、コミュニティへの帰属意識を高め、住民同士の助け合いをより深めるための可能性を持っているのではないだろうか。

このように、本論文では、高齢化社会における団地の諸問題の一つとして買い物難民問題を取り上げ、団地コミュニティの再生がこの問題の解決の鍵となり得るかについて考察した結果、今後このようにコミュニティを大事に活動する人々が存在することにより、コミュニティの重要性に対する認識が高まり、今後の買い物難民の予防として大いに役立つであろうことを指摘できた。

[主要参考文献表]

(1) 単行本

- 浅川達人、2010、『都市社会におけるつながりの位相とフードデザート』、「食品アクセスセミナー第3回」、農林水産政策研究所
- 飯田香織、2014、「コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性」『立命館産業社会論集』Vol. 49, No. 4, pp. 79-99.
- 大津ゆりえ、2011、「北海道における買い物弱者支援の現状と課題」北海道大学大学院文学研究科2010年度修士論文。
- 大山真人、2008、『団地が死んでゆく』、平凡社新書

- 笹井かおり、2010、『「買い物難民」問題 ―その現状と解決に向けた取組―』『立法と調査』Vol. 307, No. 307, pp. 109-19.
- 河合克義、2009、『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』、法律文化社
- ジェラード・デランティ、2006、『コミュニティ』、NTT出版株式会社
- 杉田聡、2013、『「買い物難民」をなくせ!』、中公新書ラクレ
- 生活科学調査会編、1963、『団地のすべて』、医歯薬出版株式会社
- 日本経済新聞地方部、1974、『団地を考えなおす』、日本経済新聞社
- 原武史、2012、『団地の空間政治学』、NHK出版
- 薬師寺哲郎、2015、『超高齢社会における食料品アクセス問題』、ハーベスト社
- 横浜プランナーズネットワーク、2012、『郊外計画開発住宅を持続可能とするためのエリアマネジメントの手引き』、特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク、横浜

グローバル — 第 15 号 —

2016年 発行

発行者 大西 比呂志

発行所 横浜市泉区緑園 4-5-3
フェリス女学院大学大学院
国際交流研究科
電話 045-812-8283